

「ロックと言えばタブラ・ラサ」考

富田恭彦

「ロックと言えばタブラ・ラサ」と、いまだに言われることがある。けれども、彼の名著『人間知性論』にはその言葉は出てこず、代わりに「白紙」(white Paper)が使われている。

確かにロックは、一六七一年の『人間知性論』の草稿で、*“rassa tabula”*と、名詞を後置した形でこの言葉を使っており、また、『人間知性論』のコストによるフランス語訳(一七〇〇年)でも、バリッジによるラテン語訳(一七〇一年)でも「白紙」は *“tabula rasa”* と訳されている。だが、「タブラ・ラーサ」(*tabula rasa*)というその言葉自体は、ロックよりもはるか以前から、しかも、アリストテレスの思想との関係において使用されており、何をもって「ロックと言えばタブラ・ラサ」とするのか、理解に苦しむところである。

せめて「ロックと言えば白紙」とでもすべきであり、ロックとアリストテレスの思想的関係を明示しないまま「ロックと言えばタブラ・ラサ」を繰り返すのは、そう発言する者の

学問的姿勢を疑わせることにもなりかねない。

「タブラ・ラーサ」という言葉の由来を一部なりとも確認して、このような流言への再考を促すこと、これが小論の目的である。

1 プラトンとアリストテレス

プラトン(Platon, c. 427-347 B.C.)は「心を蠟板に喩えた」とよく言われる。『テアイテトス』(Θεαιτητος, ラテン語名 *Theaetetus*, 191c 以下)を念頭に置いてのことである。当該箇所では、知覚の対象や思考内容が心の中にある蠟のかたまり(κίρπον ἐκταγέιον ケーリノン・エクマゲイオン)に刻印されるかどうかという観点から、記憶による知識の存否を説明する。*“κίρπον”* (ケーリノン)は「蠟の」を意味する形容詞、*“ἐκταγέιον”* (エクマゲイオン)は「刻印を受けるもの」を意味する名詞である。

当時、木の板を浅くえぐって平らに蠟を流し込んだ蠟板に、尖筆で文字などを書き記すことが広く行われていた。プラトンの言う「蠟のかたまり」がこの蠟板のことなのか、それともそこに何かが刻印される蠟のかたまりのことなのかは、必ずしも定かではない。がいずれにしても、蠟を用いたこのプラトンの喩えを、アリストテレス (*Apostolēns*, 384-322 B.C.) が継承した。彼は、『魂について』 (*Περί Ψυχῆς*, ラテン語名 *De anima*) 第三巻第四章 (429b31-430a1) において「書板」 (*γραμματοῖον* グラムマティオン) とする言葉を用い、

可能性のうちにある〔働くことができるが現実には働いてはいない〕知性は、現実性において〔まだ〕何も書かれていない書板のようなものである。 (*δυνάμει δ' οὐτως ὥστερ' ἐν γραμματοῖῳ ὃ μὴδὲν ἐνυπάρχει ἐντέλειαν περιλαμβάνον*.)

と言う。

2 アリストテレスの継承

このような捉え方は、さらにストア派に継承される。ドイツの古典文献学者ハンス・フォン・アルニム (Hans von Arnim, 1859-1931) の『初期ストア派断片集』 (*Stoicorum veterum fragmenta*, 1903-1905 全三巻、一九二四年にマクシミリアン・アデルラー Maximilian Adler, 1884-1944 が索引を第四巻としてこれに付した) 第二巻八三 (アエティオス『学説誌』第四巻一 *Aëtius, Placita philosophorum*, IV,11) には、次のような

言葉が見られる。

ストア派の人々の言によれば、人間は生まれたときに、魂の指導的な部分を、いわば、書き込むためにうまく整えられた紙 (*γράφης* カルテース) として持つており、観念の一つ一つ自分でここに書き込む。 (*Οἱ Στωικοὶ φασιν· ὅταν γεννηθῇ ὁ ἀνθρώπος, ἔχει τὸ ἡγεμονικὸν μέρος τῆς ψυχῆς ὥστερ' ἄρπτην ἐπὲργον εἰς ἀνοργαφίην· εἰς τοῦτο μίαν ἐκδοτὴν τῶν ἐνοειῶν ἐννοργάμεται.*)

‘γράφης’はまた‘γράφιον’ (カルティオン) とも言われる。アエティオス *Aëtios* は一世紀もしくは二世紀頃の学説家である。

また、ローマ市民権を持つギリシャ人著述家ブルタルコス (*Πλούταρχος*, c. 46-c. 120) は、随筆集『モラリア』 (ラテン語名 *Moralia*, ギリシヤ語原題は *Ἠθικά* エーティカ) 所収の『神託の衰微について』 (*Περί τῶν ἐκλειουσίων χρηστηρίων*, シチン語名 *De defectu oraculorum*) において、‘γραμματοῖον ἄρπαρον’ (グラムマティオン・アグラポン) という言葉を用いた (432d)。*‘ἀρπαρον’* (アグラポン) は「書かれていない」を意味する形容詞で、これが‘γραμματοῖον’ (グラムマティオン) に付され、「書かれていない書板」となる。

さらにアリストテレスを注解したアプロディシアスのアレクサンドロス (*Ἀλέξανδρος ὁ Ἀργοῦσιεύς*, 二〇〇年頃の人) ローマの市民権を持つギリシヤ人で、アテナイ「アテネ」で

アリストテレスを継承するペリパトス派の学頭を務めた）もアリストテレスの『魂について』の注解において、「書板」(πομπητερον) という名詞および「書かれていない」(ἀγραφον) という形容詞を用いた (Alexandri Aphrodisiensis *praeter commentaria scripta minora: De anima liber cum mantissa*, ed. Ivo Bruns [Berlin: G. Reimer, 1887], p. 84 参照)。

3 タブラ・ラーサ

「書かれていない書板」というこの喩えは、のちにラテン語で ‘*tabula rasa*’ (タブラ・ラーサ) と表現され、広く使われるようになる。‘*tabula*’ (タブラ) は「板」, ‘*rasa*’ (ラーサ) は「すられた」, 「平らにならされた」を意味し、「平らにならされて何も書かれていない (蠟) 板」を意味する。‘*tabula rasa*’ は、一二世紀の神学者アルベルトゥス・マグヌス (Albertus Magnus, c. 1200–1280) が、『魂について』 (De Anima, Liber III, Tractatus 2, Caputulum 17) や『知性および理解しうるものについて』 (De intellectu et intelligibili, Liber II, Caputulum 4) においてこれを用いている。

彼の弟子のトマス・アクイナス (Thomas Aquinas, c. 1225–1274) もこれを使用し、『神学大全』 (Summa Theologica) にくは *Summa Theologiae* の第一部第七九問第二項 (Pars prima, Quaestio 79, Articulus 2) において次のように言う。

しかるに人間の知性は、(……) 哲学者 (アリストテレス) が『魂について』第三巻で言うように、理解しうるものに

関して、可能性においてあり、はじめは何も書かれていない、タブラ・ラーサのようなものである。(Intellectus autem humanus: … est in potentia respectu intelligibilium, et in principio est sicut *tabula rasa in qua nihil est scriptum*, ut philosophus dicit in III de anima.)

同じくアルベルトゥス・マグヌスの弟子で十三世紀の代表的神学者の一人であったガンのヘンリクス (Henricus de Gandavo, c. 1217–1293) も、『通常問題』 (Quaestiones ordinariae) もしくは *Summa*, Articulus I, Quaestio 10) で、

哲学者 (アリストテレス) 『魂について』第三巻によれば「われわれの知性は、学ぶ前には、何も描かれていない、タブラ・ラーサのようなものである」。(Secundum PHILOSOPHUM III^o De anima «intellectus noster ante addiscere est sicut *tabula rasa in qua nihil depictum est*».)

と言う。

4 タブラ・ヌーダ

ガンのヘンリクスはまた ‘*tabula nuda*’ (タブラ・ヌーダ、裸の板、何も書かれていない書板) という表現も使用している。

いかなる人間も、はじめは何も知らない。というのも、『魂

について』第三卷に言われているように、人間の知性は、形象を受け取る前は、「何も描かれていないタブラ・ヌーダのようなもの」だからである。(Homo quilibet ad initio nihil novit, quia intellectus humanus, antequam recipiat species, est *sicut tabula nuda in qua nihil depictum est*), ut dicitur in III^o De anima.) (Ibid., Articulus I, Quaestio 1.)

この「タブラ・ヌーダ」も「タブラ・ラーサ」とともに広く用いられた。この言葉は、先述のアルベルトゥス・マグヌスにも見出され、また、一三世紀中葉の匿名の著作『魂について』第二巻・第三巻についての見解』(Sententia super II et III De anima, Liber III, Lectio 2, II. 2. 1, Sententia) には、

すなわち、知性は現実には何も描かれていないタブラ・ヌーダのようなものであり「……」(… est enim intellectus quasi tabula nuda in qua nichil est actu depictum …)

という表現が見られる。

また、イギリスの神学者ロジャー・ベーコン (Roger Bacon, 1214-1294) も『アリストテレスの第一哲学書についての問』(Quaestiones supra libros Prime Philosophie Aristotelis) で次のように言う。

われわれの知は獲得されると私は認める。というのも、魂はタブラ・ヌーダのようなものとして造られるからであ

る。(HOC CONCEDO quod scientia nostra est acquisita, quia anima creata est sicut tabula nuda.) (Opera hactenus inedita Rogeri Baconi Fasc. X, ed. Robert Steele [Oxford : Oxford University Press, 1930], p. 5.)

同じく中世の代表的神学者の一人であるヨハネス・ドゥン・ス・スコトゥス (Johannes Duns Scotus, c. 1266-1308) も『アリストテレスの『形而上学』についてのふたつとも精妙な問』(Quaestiones subtilissimae super libros Metaphysicorum Aristotelis, Prologus) において、

しかるに、人間の魂はそれ自身では知的可能性については不完全である。というのも、哲学者「アリストテレス」の『魂について』第三巻によれば、人間の魂は何も描かれていないタブラ・ヌーダのようなものだからである。(Anima autem hominis de se imperfecta est secundum intellectum potentiam, cum sit velut tabula nuda, in qua nihil depictum est secundum Philosophum 3. de Anima, …)

と「タブラ・ヌーダ」を用いている。但し、同書本論 (Liber II, Quaestio 1) では、同様にアリストテレスの『魂について』に言及しながら、

魂はそれ自身では何も描かれていないタブラ・ラーサでない。タブラ・ヌーダのようなものである「……」。(Anima de

se est sicut quadam tabula rasa, vel nuda, in qua nihil depingitur...)

と述べ、「ラーサ」と「ヌーダ」を並記している。

「ラーサ」と「ヌーダ」の並記は、マイスター・エックハルト (Meister Eckhart, c. 1260–c. 1328) にも見られる。彼は『創世記の寓意』 (*liber parabolarum Genesis*, n. 138) で次のように言っている。

しかるに、哲学者〔アリストテレス〕によれば、われわれの内なる知性はタブラ・ヌーダかつラーサのようなものとしてある〔……〕。(Intellectus autem in nobis se habet sicut tabula nuda et rasa secundum philosophum ...)

5 スアレスの場合

「タブラ・ラーサ」に戻って、その用例をもう一つ挙げておこう。中世から近代への移行期に仕事をし、デカルトをはじめ近代の知識人に大きな影響を与えたスペインの哲学者フランシスコ・スアレス (Francisco Suárez, 1548–1617) は『形而上学討論集』 (*Disputationes Metaphysicae*) において次のように述べている。

〔天使は〕、そもそも何も描かれていないタブラ・ラーサのような人間の知性を、その完全性において凌駕する。(… in qua perfectione superant intellectum humanum, qui a

principio est tanquam tabula rasa, in qua nihil est depictum.) (Disputatio XLIV, Sectio XIII, 8.)

このように、「タブラ・ラーサ」は、アリストテレスとの関係において多くの人々の使用するところとなり、近代に入ってもさまざまな人々がこれを用いた。

9 ロックの語法

冒頭に述べたように、「ロック (John Locke, 1632–1704) は、『人間知性論』 (*An Essay Concerning Human Understanding* [1690] 実際に出版されたのは前年の一六八九年) の第二巻第一章第二節において、人間の心を「どんな文字も書かれていない白紙」 (white Paper, void of all Characters) に喩える。しかし、『人間知性論』草稿には「*rasa tabula*」 (ラーサ・タブラ) という言葉があるものの (John Locke, *Drafts for the Essay Concerning Human Understanding and Other Philosophical Writings*, ed. Peter H. Niddich and G. A. J. Rogers, vol. 1 [Oxford: Oxford University Press, 1990], *Draft A*: p. 8, *Draft B*: p. 128) 公刊された『人間知性論』では「*tabula rasa*」や「*rasa tabula*」という言葉は使用されていない。